

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	破調 : 新躰詩 : 文苑
Author(s)	夢の子
Citation	龍南會雜誌, 114: 40-41
Issue date	1905-11-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5885
Right	

見よ雲彼方温泉の
峰をかすめて飛ぶ日なり
人に秘めてもうらぶれの
涙はかゝる袖なれば
唯黄昏の湖にして
我が世の性をほゝねまん

破 調

夢の子

○はかなげ
夕日冷たく紫の
雲の幕に消えてより
暗色衣迷ひ來て
低くさゝやく野の水の
調に多き怨かな。

秋の女神の裳に觸れて

綻び初めし草花も
秋は深かる憂愁には
萎みて落ちて水のうへ
小さき波の輪にゆれて
流れくゝて暗に入る
深きねにしに結ばれて
熱き血潮にふれもせば
慰む術もあるものを
たゞ「はかなげ」の思こそ
なか／＼深き怨なれ
いざ笛吹きて行雲に
思を乗せて去らせむか
紅褪せし唇に
あてゝ吹きなす我笛の
調は何とひぶくらむ

○尼

浮世のさがにほだされて

理想も戀もなき身にて

消ゆるにたふる君ならず

頭陀の姿に身をやつし

此世をわびの姿かな。

鹿の鳴く音に夢破れて

昔の戀を偲ぶ時

秘めんとすればなかくに

胸に傷を多からむ。

和

歌

夕霧

君病むときくに伏目の萩が里夢の小路を鐘たそがれぬ

薄霧のほのめく方に百舌鳥なきて夕日の丘を馬かへりゆく

、黙禱の露の朝けを神の鈴ふるとて馴れし吾かひなかな

芙蓉の雨朽棄の風とうつろひに久遠の夢の秋あわたりし

君病むときくに伏目の萩が里夢の小路を鐘たそがれぬ

薄霧のほのめく方に百舌鳥なきて夕日の丘を馬かへりゆく

、黙禱の露の朝けを神の鈴ふるとて馴れし吾かひなかな

芙蓉の雨朽棄の風とうつろひに久遠の夢の秋あわたりし